東京医科歯科大学

東京医科歯科大学は、医療系単科大学では唯一『スーパーグローバル大学』に指定された大学です。医療系分野は、日本が世界への貢献を期待されている分野の一つでもあります。東京医科歯科大学のグローバルヘルス教育について、鳥山一理事・副学長と高田和生教授にお聞きしました。



医療分野におけるグローバル化とは、どういうことなのでしょうか？



鳥山一理事・副学長



高田和生教授

ひとことで言うと、「地球規模での健康レベル向上」を考え、実行していくことだと考えます。たとえば、国や地域の医療格差をなくすこと、医療技術や制度の世界標準を作成すること、伝染病の世界的な蔓延に備えること、現代医療に求められる課題は、地球規模の視野を持たなければ解決しないことばかりです。

日本は世界トップレベルの長寿国です。高度な医療水準を保有し、世界に誇れる国民皆保険制度もあります。世界の中では医療先進国のひとつなのですが、残念ながら、グローバルな舞台においての日本のプレゼンスは決して高くはありません。

基礎研究における論文数を見ると、日本は米中英独に次いでの５位まで落ち込んでおり、国際共著率も低いのが現状です。世界保健機構（WHO）で働く日本人スタッフ数は加盟国の中でもかなり低く、世界のリーダーシップをとる人材を輩出することができていません。近年発展が著しい医療観光産業でも、アジア諸国と比較しても日本は出遅れています。

そういった意味において、日本のグローバルな視点での医療貢献度は、まだまだ低いと言わざるを得ません。ですから、医療分野におけるグローバル化とは、医療における国際標準化、医療の革新・医療政策・医療産業という分野で、世界の中での貢献度を高めることであり、その実現のために世界のリーダーになれる資質を持つ医療人を育成することだと考えています。

そのために、東京医科歯科大学が果たすべき役割とはなんでしょう？

東京医科歯科大学（TMDU）は「知と癒しの匠を創造し、人々の幸福に貢献する」ことを基本理念として掲げています。TMDU 型グローバルヘルス推進人材育成構想はその基本理念を世界に向けて展開する取り組みであり、本学では当構想が目指す 10 年後の未来像として、以下のゴールを設定しています。

「アジアにおける、グローバルヘルス推進人材育成／研究拠点としての地位を確立」

「世界規模の健康課題克服のため、集学的研究による、予防・診断・治療における革新的ソリューションを提供」
「さまざまな国・地域における課題克服のため、国内外機関と協働し、研究／教育／医療の全チャネルを開いて貢献」の３つです。つまり、東京医科歯科大学は教育及び研究において「世界規模での健康レベル向上」に貢献できる先進性のある開かれた大学になろうとしているのです。
そして、グローバルヘルスを積極的に推進していくことができる人材が、卒業生の中から多く生まれることを目標としています。
東京医科歯科大学は、医療分野に特化した大学であり、ハーバード大学との医学教育の提携、ガーナやタイ、チリなどの海外拠点で教育・研究・国際貢献活動を推進してきた実績もあります。日本の大学の中では、医学歯学教育の先進国標準へのレベルアップを牽引し、グローバル化時代に必要な医療人材の育成をリードしてきた大学だと自負もしています。このような本学だからこそ世界の医療を牽引していく人材を育成することが求められているのだと思います。

世界の医療を牽引していく人材とは、具体的にはどんな人物なのでしょう？
東京医科歯科大学が目指す人物像を教えてください。

本学のスーパーグローバル大学創生支援事業構想におけるキャッチフレーズでもある「Think Globally, Act Globally」「Think Globally, Act Locally」という２つの考え方にヒントがあると思います。医療の課題解決には、地球規模の視野を持ちながら、文字通りグローバルに行動するべきものと、地域の環境や経済などを考慮してその地域に合わせた行動をすべきものがあります。グローバルとローカルを、世界と日本という一元的な見方ではなく、世界と世界各国と捉え、卒業生たちが世界各地で活躍する未来を期待したいと思っています。
そのためには、世界共通言語である英語の言語力は必須であり、また文化（歴史、経済、宗教、習慣、行動様式、食生活など）や価値観の多様性を十分理解し、それらを異にする人たちと触れ合う経験を豊富に積み、尊重することができる人物になることも大切です。さらに、その上で日本人としてのアイデンティティに誇りを持ち、日本の歴史、文化、制度に習熟していること。それによって、世界において日本そして日本人が果たすべき役割を理解し、行動することができるのだと考えます。それに加えて、多様な文化・価値観をもつ世界の様々な地域の人材と協働し問題解決に取り組むために、論理的思考力、クリティカルシンキングスキル、創造的思考力、リーダーシップスキル、そしてマネジメントスキルなどの、いわゆるソフトスキルも不可欠です。
医療に関する知識だけでなく、こうしたいわゆる国際人としての資質を、学生のうちから修得することが必要なのです。

世界的なグローバル化の波は医療分野にも押し寄せていて、グローバル人材が求められている、そしてそのためには、単なる医学知識だけでなく、それらソフトスキルの獲得が重要であるということですね。そのために、東京医科歯科大学で行われている教育についてお聞きしたいのですが、その前に学生全体の意識改革や啓発も必要なのではないでしょうか？

その通りです。もっとも大切なのは学生自身の内的動機付けと自身によるゴール設定だと考えています。その目的で、まず入学直後の全学科１年次学生を対象にした「国際医療問題に関する英

語模擬交渉ワークショップ（Global Communication Workshop）」を開催しています。グローバルな舞台で活躍するためには、さまざまなステークホルダーが抱えている問題を正しく理解し、その原因を分析して、効果・可能性を予測し、最良と思われるソリューションを見出すことが必要です。このワークショップはこれらを留学生などを交えて、模擬体験してもらい、その中で今後自身が身につけてそして洗練していかなければならないスキルなどに気づいてもらおうという試みです。参加学生からも「将来は国際的な舞台で活躍したい」といった声が多く寄せられています。



Discussion Café での議論の様子

その他にも、早期からロールモデルを見つけキャリアビジョン実現のために行動を起こしていただくために、本学の卒業生をはじめ、実際に医学医療分野でグローバルに活躍している人と交流するイベント「ファインド・ユア・ロールモデル・セッション（“Find-Your-Roll-Model” session）」を毎月開催していますし、異なる文化や価値観を持つ学生や医療以外の分野でのキャリアを目指している学生達との交流を通して本学学生のネットワーク形成・拡大を支援する取り組みとして、健康・医療に関する国際的問題をテーマに東京医科歯科大学と早稲田大学や英国インペリアル・カレッジの学生が英語で議論する「ディスカッション・カフェ（Discussion Café）」など、さまざまな取り組みを行っています。

なるほど。ではその上で、東京医科歯科大学が目指すグローバル人材の育成のために展開されている教育をお聞かせください。

世界共通言語である英語は道具であり、同言語の運用力強化は必須ですので、そのために、必須科目での学習の実質化や長期休暇中のアカデミック英語集中特訓コース開講など、さまざまな取り組みを行っています。またその中で、論理的思考力やクリティカルシンキングスキルも到達目標にあげ、その洗練のための少人数議論やディベートなども取り入れています。また、特に国際人としての教養という観点から、人文社会学系教育科目の二ヶ国語履修化を進めています。

さらに、「世界規模での健康レベル向上」の中心人物として活躍する人材を育成するために、グローバルな舞台で医学医療分野のリーダーとして活躍するというキャリアビジョンを抱く志の高い学生がグローバルリーダーに必要な資質を徹底して磨くための機会を設定すべく、2013 年度からリーダー養成英語選抜プログラム「ヘルスサイエンスリーダーシッププログラム（HSLP）」を開講しています。ケースメソッドを使用し、アクティブラーニングを取り入れ、必要な思考力、リーダーシップスキルなどのソフトスキルを徹底的に磨くようカリキュラムが組まれています。現在は各学年 20 人程度ですが、今後、人数を増やしていく計画です。

大学院教育でも、この HSLP の開講を検討しているほか、グローバルヘルスリーダー養成コースというカリキュラムも新設する予定です。将来的には、WHO などの国際機関の医療行政部門で活躍し得る人材を輩出し、卒業生の間でも国際的な人的ネットワークを確立することが目標です。

また、教育・研究において最も大切なことは集学的アプローチだと思っています。地球規模の保健医

療課題の解決には、疾患治療に加え、疾患予防への努力、そして予防や回復を阻むさまざまな環境社会的要因の除去が必須です。さらに、先進医療だけでなく、低コスト医療技術の開発も必要で、医療システムや医療保険制度の改革も要します。そのためには基礎医学、臨床医歯学だけでなく、応用工学、社会医学、社会科学など、さまざまな学問の連携が不可欠なのです。ですから、集学的アプローチのできる体制を築くため、大学全体の教育改革を担う組織として 2016 年３月に統合教育機構を設置しました。

グローバル化をすすめていく上で、研究面で重要視していることはありますか？

研究体制において特に重視しているのは、海外拠点との連携です。これまでも各国に根ざした研究を推進してきましたが、今後は地球全体を視野に入れた研究体制を構築していく必要があります。そこに地域の特殊性を加えていく発想ですね。
そこで重要になるのがフィールドワークです。その場所に行き、地域ならではの経済や環境なども含めて捉えることで、真の意味でのグローバルヘルスに貢献できるのだと思います。具体的には海外の大学との共同研究などを積極的に進めていきます。
４年次の研究実習は、海外の大学に留学して行うこともできます。英国のオックスフォード大学に３ヶ月間留学した学生は、「多国籍な研究環境の上に、さまざまな分野の研究者がいるので、語学力に加えてコミュニケーション力の重要性を痛感しました」と語っていました。こうした体験を学生時代にしておくことは、グローバル人材の育成という意味でもとても重要なことです。

最後に、海外で活躍する卒業生の支援体制について教えてください。

東京医科歯科大学では、ハーバード大学と提携したプログラムを体験した卒業生が、すでに海外で活躍し始めています。また、チリやタイの拠点で研究の芽が出始めた卒業生もいます。こうした海外で活躍する人材は、本学にとっての資産でもあります。これまで、本学にはそうした人材を組織的に支援する仕組みはありませんでした。
また、2015 年度にジョイントディグリープログラムを開設しました。このプログラムを通じて、海外の人材支援を行うと同時に、世界規模での人的ネットワークを構築していきたいと考えています。地球規模での健康・医療の向上に貢献する、世界に冠たる医療系総合大学を目指していきます。

インタビューに答えていただいた方



■**烏山一**
東京医科歯科大学
理事・副学長
(企画・大学改革)

1978 年東京医科歯科大学医学部卒業。同年筑波大学附属病院医師。1980 年に東京大学大学院医学系研究科博士課程に進み、1984 年に博士号を取得。1984 年スイス・バーゼル免疫学研究所研究員、東京大学医学部免疫学教室助手を経て、再びスイス・バーゼル免疫学研究所研究員となる。その後、東京都臨床医学総合研究所免疫研究部・部門長、東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科免疫アレルギー学分野教授、東京医科歯科大学副理事などを歴任。2014 年 4 月より現職。研究分野は免疫学。



■**髙田和生**
東京医科歯科大学
統合教育機構教授

1994 年九州大学医学部卒業。米国のベス・イスラエル・メディカルセンターにおいて内科臨床研修終了後、米国国立衛生研究所にて膠原病専門内科研修を行うとともに、膠原病分野の臨床研究に従事。同時にデューク大学大学院介入臨床研究修士課程を専攻し、同修士号取得。2002 年に帰国後、東京医科歯科大学膠原病・リウマチ内科学助手、講師、同大学医歯学融合教育支援センター准教授などを歴任。2012 年グローバルキャリア支援室初代室長・教授に就任し、2016 年 4 月より現職。研究分野は膠原病内科学、医学教育。